

(二〇一八年度)

7 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は23ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しきらずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人間といえども他の動物や植物と同じく、地球という物体の表面でその自然現象の網の目に依存しつつ、他の生物と共存しながら生きていく自然の一部分であるという考えは、現代人の人生観として定着しつつある。¹しかし反面、このような広漠とした自然平等の眺望の視野のなかで、人間と他の生物や自然との差異と亀裂の風景の実感もまた、ますます強い印象で私たちに迫ってきているのも事実である。

今から五十万年前にホモ・エレクトゥスが火を使い始め、槍や棒のような武器を手にして狩猟生活をしていたとき、あるいは紀元前一千年頃に地上に住んでいた私たちの祖先のホモ・サピエンスが鉄製の道具を用い、宗教的儀式を行なっていたときでも、人間と他の動物は大きく違っていたのだ、ということが出来る。²ただしその違いは、モグラは空中を飛ぶことはできないが、鳥類は飛ぶことができるという違いと、同じ種類の違いと見ることもできただろう。しかし、その後の人類の歴史のなかで、人間が多様で複雑な道具や機械をつくって農耕を始め、車や船をつくり、貨幣をつくって商業を始め、近代になって更にそれらを発展させて工業化社会をつくり、現代に至ってコンピュータを発明し、それを使って月の表面に到着したり、生物の遺伝子を操作して新しい生物の種を人為的につくり出したりするようになると、私たちは人間と他の動物の生活の差を増大していく開きを眼前にして、人間と他の生物や自然との共通性よりも、その余りにも大きな差異に眼を奪われてしまう。

たしかに生物の形態や器官の動きも不変ではなくて、時間の経過とともに変っていく。しかし、この変化は、それぞれの生物の種が共有している遺伝子³給源の遺伝的浮動、隔離、突然変異そして自然選択などが原因となって少しずつ変っていくものであり、その変化に要する時間は通常、数万年、数十万年、数百万年という時間単位で示されている。これにたいして人間のばあい、ヒト科の出現から現在までの約六百万年の間、形態学的にそれほどの変化はないし、特にホモ・サピエンスという種の出現以来の約三万年の年月を通じて、形態的にはほとんど変っていない。

これに反して人間の文化、即ち生活様式は、過去三千年くらいから加速度的に変化して、特にこの三、四百年以前からヨ-

ロッパを中心とする地域では科学技術の開発とともに急速に変化してきた。特に第二次大戦以降の半世紀に至らんとする期間では、今までにない科学技術の急速な開発が人間の生活を、しばしば混乱にまき込むほど大きく変えようとしている。このような人間の生き方と人間以外の動物の生き方との違いを説明するのに、人間は理性を、科学を、あるいは文化をもっているからだと説明することは、人間も他の動物と同じ動物の一種であり、他の生物と同じように自然のなかに生きているのだという事実によく合うように人間を説明する仕方よりも、他の生物やその自然とは異なるのだという説明を与えるのに都合よくできている説明の仕方である。何故なら、他の動物は理性も科学も文化ももっていない、ということをして、この説明は暗に前提としているからである。そこで私は、人間が⁴理性をもつとか、文化をもち科学技術をもつなどというふうに規定するよりも、もつと根源的に、人間が他の動物と同じでありながらその特色とする違いを、「人間は言葉をもつ動物である」という規定の仕方から説明してみようと思う。

人間を定義して⁵ロゴスをもつ動物と表現したのはおそらく古代ギリシャの人々だったらしく、アリストテレスの著作などにしばしば引用されている。ギリシャ語でロゴスと言うとき、それは「言葉」を意味すると同時に、「考え」たり「判断」したり、「推理」したりする「理性」という意味ももっている。西欧の思想の伝統のなかで、この「ロゴスをもつ動物」という表現のロゴスは、いつのまにか理性という言葉の意味の方にひきつけられて、「理性をもつ動物」または理性的動物(rational animal)というふうに使われてきた。しかし、「理性」とか「理性的」という言葉の意味するものに具体的な構造を与えることは不可能であり、従ってその意味は曖昧になってくる。人間でありながら理性的でないと言われるようなばあいがあるし、宗教はもともと理性的な心の働きとは別な心の働きの上になり立つとか、詩やロマンティックな文学は理性的でない、などと言われる。しかし「ロゴスをもつ動物」ということを「言葉を語る動物」と理解すれば、宗教はもとより詩やロマンティックな文学はすべて言葉で語られ表現されているのだから、「ロゴスをもつ」ということと矛盾はしない。しかも「言葉で表現する」とか「言葉で語る」ということの意味は現象としてみても明白であり、言葉で語っているかないかは、誰にでも一義的に区別できる。

特に現在のように言語に関する科学的研究が進み、その統語論的構造や意味論的構造がより具体的に解明されるようになれ

ば、「言葉をもつ」ということがどのような構造のメカニズムで行なわれ、それが人間の知識に、知覚による知識にはないどのような特徴を与えたか、そしてそのことが人間の生活の仕方によつてどのような影響もあたえたか、がより明確になつてきた。ロゴスを理性という曖昧な表現にほんやくして、理性的ということをも反宗教的、非文学的に、そしてそのうちに論理学的、数学的、科学的という言葉の意味に接近させ、更にはそのような生活様式を生み出した近代西歐文化とまで結びつけ、近代西歐文化のスタイルに反する他の社会の生活スタイルを「非合理的」とか「前論理的」とか、あるいは最近のように表現を変えて、X などと呼ぶことになつても、なお人間の間に文化的な差別をつけるときは根拠に使われてきたことは否定すべくもない。これこそ「合理性」という語の「非合理的の使用」という他はない。

ところで、人間が実際に使っている言語の外見上の構造は、それぞれの国語によつて違つてゐるのは事実である。しかし、それにも拘わらず、それらに共通な構造とメカニズムを探求してみると、色々なレベルで単位を設立し、この単位を組合せて色々な言語表現をつくり、それによつてより限定された言語情報を構成し伝達する、という点で共通なものをもつてゐる。音素または文字を組合せて語を、色々な語を組合せて文を、そして多くの文を組合せてつないでより長い文、というより物語りや理論（一緒にしてストーリーと呼ぶことにする）をつくる。そしてこれらの組合せをつくるばあい、使うことのできる意味のある組合せと、使うことのない無意味な組合せとを区別し、それぞれの発話状況に適した有意義な組合せを選んで、発話の行為をおこなうという、言語記号の構成（組合せを原則とした）とその適用のための知的活動がこれに伴わねばならないが、この言語を使用することのために必要な知的操作は、有意義な記号排列を使用するために必要な演繹的・推論的な仕事や、状況にふさわしいかどうかを定める判断や、その記号で伝達される情報の真偽を判定する認識的な働きをふくんでゐるが故に、まさに「理性的」とよばれるにふさわしい働きであろう。この意味で「言葉を使う」ということと「理性的である」ということが一つになるのであつて、言葉を宗教的信仰の内容を示すために使うか、詩をつくるために使うか、科学的記述のために使うか、ということでは区別するのは次元が違ふのである。

（沢田允茂『言語と人間』より）

〔注〕 遺伝子給源^{ブール}…繁殖可能な個体群がもつ遺伝子の総体。 遺伝的浮動…遺伝子の組合せが偶然に変動すること。

統語論的構造…文法的構造と同義。 音素…ある言語において同一と見なされる音の最小単位。

問一 傍線部1で著者が問題にしている状況を簡潔に言い換えるのとどのようになるか。次の中からもっとも適切なものを選び、選べ。

a 人間は一面では地球の上での自然界の一部を成す生物の一つであるが、自然平等の結果として、他の生物との差も増大してきている。

b 人間は他の動物や植物と同じく、一面では地球という物体の表面で他の生物と共存しているが、反面、自然平等における亀裂の風景の実感も追ってきている。

c 人間は現代人の人生観としては他の生物と同様に自然界の一部であるが、反面、自然平等の眺望の視野のなかでは他の生物との差異の実感もまたもっている。

d 人間は一面では他の多くの生物と共存しながら生きている自然界における生物の一種であるが、反面、他の生物とのあいだに差異や亀裂も存在している。

問二 傍線部2で述べられていることの趣旨は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 昔から人間は他の動物と大きく違っていたが、それは、モグラのような動物は空中を飛ぶことはできず、鉄製の道具も用いないのと同様で、鳥類が飛ぶことができるようには違っていない。

b 昔から人間は槍や棒のような武器を手にして狩猟生活をするなど、他の動物と大きく違っていたが、その違いはモグラと鳥類の違いほどではなく、人間だけが特別であるということにはならない。

c 昔から人間は他の動物と大きく違っていたが、その違いは、単に個々の生物種はそれ独自の特性をもっているということの反映に過ぎず、人間だけが特別であるということにはならない。

d 昔から人間は道具を用いるなどして他の動物と大きく違っていたが、その違いは特別のものではなく、宗教的儀式を行なっていたときでも、鳥類のように空中を飛ぶことはできなかった。

問三 傍線部3で言及されている類いの変化を一般的に表す用語は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 成長

b 進化

c 発達

d 繁殖

問四 傍線部4について、著者がこのような説明に難点があると主張する主な理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人間が理性等をもつ故に他の生物と異なると説明することは、理性の概念が曖昧なうえに、理性等を他の生物はもっていないということを暗に前提としている点で十分な説明になっていないから。
- b 人間が理性等をもつ故に他の生物と異なると説明することは、第二次大戦以降の半世紀において今までにない科学技術の急速な開発が人間の生活を大きく変えてきたことを説明できないから。
- c 他の生物と共存しながら自然現象の網の目に依存して生きている人間は自然の一部分であり、理性等を強調することは人間と他の生物との差異を現代人の人生観として強く印象づけてしまうから。
- d 人間が理性等をもつ故に他の生物と異なると説明することは、私たちの祖先のホモ・サピエンスが鉄製の道具を用い、宗教的儀式を行なっていたという事実を正当に説明できないから。

問五 傍線部5の「ロゴスをもつ動物」という概念は、著者によればどのような歴史的変遷を経てきたか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 元のギリシヤ語「ロゴス」がもっていた「言葉」という意味と推理、判断したりする「理性」という二つの意味のうち、「理性」の意味の方にひきつけられて、人間を「理性的動物」と規定するに至った。

b 「ロゴス」がもつ「言葉」という意味が、宗教はもともと理性的な心の働きとは別な心の働きの上に成り立つとか、詩や文学は理性的ではないとみなす伝統的思想のなかで、「理性」という意味に変質していった。

c アリストテレスが用いていた「ロゴス」というギリシヤ語が、西欧の思想の伝統のなかで「言葉を語る動物」という意味にひきつけられていき、その結果、人間を「理性的動物」と規定する宗教が生まれた。

d 古代ギリシヤの「ロゴス」という表現は本来「理性」を意味し、その結果、詩やロマンティックな文学を理性的ではないものとして宗教とともに「理性的動物」としての人間と矛盾するものと捉えるようになった。

問六 ⁶ X に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a ファシズム

b 民主主義国家

c 発展途上国

d 社会主義国

問七 傍線部7で著者が言う「合理性」という語の「非合理的使用」とは、具体的に言うところのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 理性的ということ(「合理性」をロゴスという曖昧な概念に結びつけ、その統語論的構造などを示すことによって宗教的、文学的スタイルを「非合理的」として否定するために用いること。
- b 理性的ということ(「合理性」を知覚による知識にはない特徴として捉え、知覚による知識を宗教的、文学的な「非合理的」な生活スタイルとして否定するために用いること。
- c 理性的ということ(「合理性」を言語の意味論的構造に基づいて具体的に解明し、それによって近代西欧文化と異なる社会のスタイルを「非合理的」として扱うために用いること。
- d 理性的ということ(「合理性」を近代西欧文化に結びつけることによって、近代西欧文化のスタイルに反する他の社会のスタイルを「非合理的」として否定するために用いること。

問八 傍線部8で著者が言う、人間の言語に「共通な構造とメカニズム」とは、ここでは具体的には何を指しているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a ある言語表現が状況にふさわしいかどうかを定める判断を演繹的・推論的に行なうメカニズム。
- b 単位を設立し、その単位を組合せることによって次々と言語表現をつくり出していくメカニズム。
- c 言語を科学的記述のためにも宗教的信仰の内容を示すために非理性的にも使えるメカニズム。
- d 近代西欧文化に反する他の社会のスタイルも前論理的に用いて言語によって表現できるメカニズム。

問九 傍線部9で著者が主張している内容を簡単に述べ直すとどうなるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 言語記号を組合せて言語表現をつくり、それぞれの国語によって違う構造を用いて発話を行なう行為は、限定された言語情報を構成し伝達する文化的作業をふくんでおり、この意味で「言葉を使う」ことが「理性的である」ことと一つになる。

b 言語記号の構成のための知的活動は理性的であるが、それは科学的記述のためにこそ必要な認識的な働きであり、宗教的信仰の内容を示すために使うときには「言葉を使う」ことが「理性的である」ということと一つにはならない。

c 言語記号を組合せて色々な言語表現をつくり、それらの表現を発話状況に応じて使用する、という知的操作は、理性的とよばれるにふさわしい働きであり、この意味で「言葉を使う」ことが「理性的である」ということと一つになる。

d 言語記号を組合せて文を、そして多くの文を組合せて物語りや理論をつくることは、科学的記述を行なうための演繹的・推論的な認識をふくむ理性的行為であり、この意味で「言葉を使う」ことが「理性的である」ということと一つになる。

問十 本文で著者が述べている考えと相容れない主張を次の中から二つ選べ。

a 宗教や詩やロマンティックな文学を人間がもつということは、「ロゴスをもつ動物」としての人間観と矛盾しない。

b 現代の科学技術の開発は、人間は科学や文化をもっているが故に他の生物とは異なるということを示している。

c ロゴスを理性という曖昧な表現にほんやくすることによって、近代西欧文化に反する生活への差別が生まれた。

d 言語に関する科学的研究により、「言葉をもつ」ことがどういふメカニズムによるのかが明らかになってきた。

e 人間を他の動物と区別するためには、人間は科学的記述に使うための言葉をもっているという点に注目すればよい。

次の文章は、九州の小倉に赴任した森鷗外が、「福岡日日新聞」の主筆猪股為治の依頼に依えて書き、明治三十二年一月に発表したもの的一部分である。これを読んで、後の間に答えよ。

予は終に人の己を席に延くを待たぬやうになつた、自ら席を設けて公衆に語るやうになつた。「柵草紙」といつたのがその席だ。この『柵草紙』の盛時が、即ち鷗外といふ名の、毀譽褒貶の旋風に翻弄せられて、予に実に副はざる偽の幸福を贈り、予に学界官途の不信任を与へた時である。その頃露伴が予にいふには、君は好んで人と議論を闘はして、殆ど百戦百勝といふ有様であるが、善く潤ぐものは水に溺れ、善く騎るものは馬より墜つる訳で、早晚一の大議論家が出て、君をして一敗地に塗れしむるであらうといつた。この言は或意味より見れば、確に當つた、否当り過ぎた位だ。時代は奮に一の大議論家を出したのみではなくて、殆ど無数の大議論家を出して止む時がない。即ち新文学士の諸先生がそれである。試みに『帝國文学』の初の数十冊を始として、同時に出た博文館の『太陽』以下の諸雑誌、東京の諸新聞を見たならば、鷗外といふ名に幾条の箭が中つてゐるかが知れるだらう。鷗外といふ名はこの乱軍の間に聞えなくなつた。鷗外漁史はここに死んだ。読者は新年の初刊を看てここに至る時、縁起が悪いといふかも知れない。しかし初春の狂言には曾我を演ずるを吉例としてある。曾我は敵討で、敵を討てば人死のあることを免かれない。いはんや鷗外漁史は一の抽象人物で、その死んだのは、兒童の玩んでゐた泥孩が毀れたに殊ならぬのだ。予は人の葬を送つて墓穴に臨んだ時、遺族の少年男女の優しい手が、淨い赭土をぼろぼろと穴の中に翻すのを見て、地下の客がいかにも軟な暖な感を作すであらうと思つたことがある。鷗外³の墓穴には沙礫³乱下したのを見る外、殆ど軟い土を投じたのを見なかつた。ただ一ついくらか手軟だと思つたのは、『ほととぎす』の記者が、鷗外も最早今まで我らに与へたほどのものをば与ふことを得ぬであらうといつた位なものだ。ついでだから話すが、今の文壇といふものは、鷗外陣亡の後に立たものであつて、前から名の聞えてゐた人の、なほその間に雜つて活動してゐるのは、殆ど彼『ほととぎす』の子規のみであらう。或人がかつて俳諧は普通の徳があるとかいつたが、子規の一派の永く活動してゐるのは、この普通の徳にでも基いてゐるものであらう。予が主筆のために説かんと約した鷗外漁史の事は此に終る。しか

し予は主筆に、予をしてなほ暫く語らしめんことを願ふ。想ふにこの文を読むものは予に対つて、汝は汝の分身たる鷗外の死んだのを見て、奈何の観を作すかと問ふであらう。予は唯だ笑止に思ふに過ぎぬ。予は唯だここに一炷の香を拈つてこれを甲するに過ぎぬ。予にしてもし彼の偽の幸福のために、別方面の種々の事業の阻礙をさへ忘るるものであつたなら、予は我分身と与に情死したであらう。さうして今の読者に語るものは幽霊であらう。幽霊は怨めしいといつて出るものに極まつてゐる。もし東京に残つてゐる鷗外の昔の敵がこの文を読んだなら、彼らはあるいは予を以て幽霊となし、我言を以て怨めしいといふ声となすかも知れない。しかしそれは推測を誤つてゐる。敵が鷗外といふ名を標的にして矢を放つ最中に、予は鷗外といふ名を署することを廃めた。矢は鬚毛の如くに立つても、予は痛いとも思はなかつた。人が鷗外といふ影を捉へて騒いだ時、その騒の止んだ後も、形は故の如くで、我は故の我である。畜に故の我なるのみではない、予はその後も学んでゐて、その進歩は跛躄の行ぐが如きながらも、一日を過ぎれば一日の長を得てゐる。予は私に信ずる。今この陬邑にあつて予を見るものは、必ずや怨懟不平の音の我口から出ぬを知るであらう。予は心身共に健で、この新年の如く、多少の閑情雅趣を占め得たことは、かつて書生たり留學生たりし時代より以後には、殆どない。我学友はあるいは台湾に往き、あるいは欧羅巴に遊ぶ途次、わざわざ門司から舟を下りて予を訪うてくれる。中にはまた酔興にも東京から来て、ここに泊つてゐて共に学ぶものさへある。我官僚は初の間は虚名の先づ伝つたために、あるいは小説家を以て予を待つたこともあつたが、今は漸くその非を悟つてくれたらしい。予と相交り相語る人は少いながら、一人親しい。予は『めざまし草』を以て、相更らず公衆に対しても語つてゐる。折々はまた名を署せずに、若くは人の知らぬ名を署して新聞紙を借ることもある。今予に耳を借す公衆は、不思議にも『柵草紙』の時代に比して大差はない。予は始から多く聴者を持つてはゐなかつた。唯だ昔と今との相違は文壇の外にあるので、新聞紙で名を弄ばれる憂が少いだけだ。『莊子』に虚舟の譬がある。今の予は何を言つても、文壇の地位を争ふものでないから、誰も怒るものはない。彼虚舟と同じである。さればといつて、読者がもし予を以て文壇に対して耳を掩ひ目を閉ぢてゐるものとなしたならば、それは大に錯つてゐるのであらう。予は新聞雑誌も読む、新刊書も読む。読んで独り自ら評価してゐる。唯だこの評価は思想を同じうしてゐないものの評価で、天晴批評と称して打出だして言挙すべきものでは

ないばかりだ。しかし筆の走りついでだから、最一度主筆に追願をして、少しくこの門外漢の評価の一端を暴露しようか。明治の聖代になつてから以還、分明に前人の迹を踏まない文章が出でたといふことは、後世に至つても争ふものはあるまい。露伴の如きが、その作者の一人であるといふことも、また後人が認めるであらう。予はこれを明言すると同時に、予があだかもこの時に逢うて、此の如き人に交ることを得た幸福を喜ぶことを明言することを辞せない。また前に挙げた紅葉等の諸家と俳諧での子規との如きは、才の長短こそあれ、その作の中には予の敬服する所のものである。次にここに補つて置きたいのは、翻訳のみに従事してゐた思軒と、後れて製作を出した魯庵とだ。漢詩和歌の擬古の裡に新機軸を出したものは姑く言はぬ。およそこれらの人々は、皆多少今の文壇の創建に先だつて、生理の運命に迫られたものだ。それは丁度雜りものの賤金属たる鷗外が鑄潰されたと同じ時であつた。さて今の文壇になつてからは、宙外の如き抱月の如き鏡花の如き、予はただその作の或段に多少の才思があるのを認めたばかりで、過言ながら殆ど一の完璧をも見ない。新文学士の作に至つては、またまた過言ながら一の局部の妙をだに認めたことがない。予は是においてまさに自ら予が我分身の鷗外と共に死んで、新しい時代の新しい文学を味ふことを得ないやうになつたかを疑はんとするに至つた。然るにここに幸なるは、一事の我趣味のなお依然たることを証するに足るものがある。それは何であるか。予は我読書癖の旧に依るがために、欧羅巴の新しい作と評とを讀んでゐる。予は近くは独逸のゲルハルド・ハウプトマンの『沈鐘』を讀んだ。そして予はその好処の我を動かすことが、昔前人の好著を讀んだ時と違はぬことを知つた。鷗外は殺されても、予は決して死んではゐない。

(森鷗外「鷗外漁史とは誰ぞ」より)

〔注〕 ○柵草紙：鷗外が出した文芸雑誌。

○曾我：「曾我物語」を題材にした歌舞伎。

○泥孩：泥で作つた人形。

○沙磔：砂や小石。

○ほととぎす：子規一派の俳句文芸雑誌。

○一炷の香を拈つて：一くゆりの香をくゆらして。

○阻礙：隔てさまたげられること。

○蝟毛：はりねずみの毛。数の多いたとえ。

○跛躄：足の不自由なすつぽん。

○阪邑：辺境。

○怨懟：恨み。

○めさまし草：鷗外が出した文芸雑誌。

○虚舟の譬：胸

中に何のわだかまりもないたとえ。

○賤金属：つまらない金属。

問一 傍線部1はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 技能に優れている者は他人のうらやみを買ひ、攻撃を受けるということ。
- b 技能に優れている者はその技を誇って、かえってわざわいを招くということ。
- c 技能に優れている者はより優れた者の出現によって、敗者になる運命にあるということ。
- d 技能に優れている者はその技が逆に働いて、失敗することもあるということ。

問二 傍線部2はどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 鷗外という作家が、多角的に論じられているということ。
- b 鷗外という作家が、いろいろな意味で注目されているということ。
- c 鷗外という作家が、いくつものジャンルで活躍しているということ。
- d 鷗外という作家が、あちこちで批判されているということ。

問三 傍線部3はどのようなことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 鷗外に対して文壇の多くは、厳しい批評を投げかけたということ。
- b 鷗外に対して文壇の多くは、無関心になっていったということ。
- c 鷗外に対して文壇の多くは、あわれみを禁じ得なかったということ。
- d 鷗外に対して文壇の多くは、反感を覚えたということ。

問四 傍線部4「我分身」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 生活者としての鷗外自身
- b これまでの鷗外の生
- c 鷗外漁史という作家
- d 鷗外を評価してくれた人

問五 傍線部5はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 東京にいる昔の敵は、死んだ人の魂が語っているものと見なし、鷗外が文壇に未練を残していると思うこと。
- b 東京にいる昔の敵は、死んだ人の魂が語っているものと見なし、自らにわざわざ起きないとよいと思うこと。
- c 東京にいる昔の敵は、成仏できない死者がこの世に出現しているものと見なし、鷗外が恨みを抱いていると思うこと。
- d 東京にいる昔の敵は、成仏できない死者がこの世に出現しているものと見なし、気味が悪いと思うこと。

問六 傍線部6「しかしそれは推測を誤つてゐる」と筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 自分は作物を発表しなくなっただけであり、自分流の歩みを進めていて、恨みなどは持っていないから。
- b 自分は文壇で酷評にさらされても元気であり、田舎で交流を深めていて、不平はないから。
- c 自分は作物を発表しなくなったことにより、批判されるわずらわしさがなくなり、心静かであるから。
- d 自分は文壇を去ることによって自由を得、気楽に風雅を楽しんでおり、もとの自分にもどった気分であるから。

問七 傍線部7のように筆者が述べる理由は何か。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 自分の批評は、文壇の地位を争うためのものではないから。
- b 自分は、雑誌や書物を読んで自分流の評価を行っているから。
- c 自分の評価は、思想を共有していない者の評価であるから。
- d 自分は、前人未踏の作品を書いた作家と親しく交友しているから。

問八 傍線部8はどういうことか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 文壇人としての鷗外は批判によって殺されたが、自分は今、評価する人として文壇に逆襲しているということ。
- b 文壇人としての鷗外は東京で殺されたが、作品を評価する人としての自分は田舎で生きているということ。
- c 作家としての鷗外は文壇人に殺されたが、生活者としての自分は新しい作品を読むことで前進しているということ。
- d 作家としての鷗外は文壇人に殺されたが、本体である自分自身は悠然と生きているということ。

問九 次の中から森鷗外に関係するものを二つ選べ。

- a 『道草』
- b 『五重塔』
- c 『金色夜叉』
- d 『雁』
- e 『春』
- f 自然主義
- g 没理想論争
- h 余裕派
- i 耽美主義
- j 硯友社

三 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

われわれは人間として生きて、これを事実として認めることから考えてゆこう。いうまでもなく、生きていくということはさまざまなたらきを含んでいる。呼吸し、食い、動き、見たり聞いたりする、など。しかしわれわれは生理学を習ってはじめて呼吸や運動を行なうのでももちろんない。生まれつきそういう機能を与えられている。そういう機能が自分が実現しているということ、つまり生きていくということは、分別をいれずに直接にわれわれに知られている。もちろん後天的な経験によつて、そういうはたらきの実現は、たんに本能的なものでなくなり、習慣によつて決定される要素を多分にもつに至つていゝるが、それでもやはり無分別に行なわれる、というのが普通である。こういう直接な生活経験を「体験」といつている。これは事実として確認するよりほかないものである。

裏からいえば、それを事実としてもたない者にそれを教えわからせることはできないものである。かりに飢えを感じたことのない人があるとすれば、そういう人に飢えの感じを教えることはできぬ。色を見たことのない人に色は何であるかを言葉で説いてわからせることはできない。冷暖自知というのも同じである。こういう生の直接的意識を体験といふのである。

しかるにわれわれは事あれば「反省」する。反省といふのは、外国語でそれを reflect という場合、同時に「反射」を意味するように、生を鏡に写して見ることにたとえられる。体験が生の直接的意識であるのに対して、反省は、生をある距離において、ある中間者（表現）を介して間接に見ることである。そしてこれは、別の言葉でいえば、「考えること」、思考とか思惟とかいうはたらきにほかならない。またこのようなたらきの能力を、「理性」といい「知能」といつている。——そして動物的生が無反省な本能的なものであるに對して人間の生が反省を含むという点に、人間の人間たる特質を認めることによつて、ギリシア風に「人間は理性をもつ動物である」といわれ、また近世の生理学や心理学からは「人間は知能の著しい発達をとげた動物である」ともいわれる。もちろんギリシアの哲学者のいう「理性」と近世の心理学者のいう「知能」とは同じものではないが、われわれの今の立場からはまだ区別がないのである。

さて「反省」ないし「思考」のはたらきをその最も著しい姿において見つめよう。いったいわれわれの体験は、ある時ある場所である限られた状況のもとに成立し、そういう限られた状況を内容としている。例えば見たたり聞いたりできる範囲はせまいものである。しかるに思考は、もちろんその成立の条件は限られているにしても、その及びうる範囲ははるかに広く、ある意味で無限である。百里先のものは見ることはできぬが、千里も離れたところにいる友のことを考えることはできる。もつとも今では電波を通じて遠い世界の声を聞くことができるが、それはすでに巨大な思考の作業によって創り出された装置を介しているのであつて、今いうのはその点なのである。そして思考はかように空間的距離を超えることができるのみならず、時間をも超えることができる。

われわれの反省は、現在の時を超えて、過去の方向にも未来の方向にも、つまり、すでにあらざるものにも未だあらざるものにも、至ることができるのである。理性のはたらきを昔から靈妙というふう形容するのは、上のような理性の超越の能力を指しているのである。もちろん上のようにいうのは半ばたとえである。思考は、直接な感覚的經驗と同じ次元で無限に至るのではない。千里の外を考えることは、千里の外を見ることではない。思考は具体的な視覚そのものの延長でなく、抽象的な、次元のちがった視力である。それははたらきは、事物の具体性を犠牲にしてはじめてあがなわれる超越である。けれどもやはり時を超え場所を超えるのである。——この思考の超越力が、われわれの知る宇宙のいかなる力とも似ない独特なものであることは、しばしばいわれたところである。その最も徹底した表現は、パスカルに見出すことができる。

パスカルは、人間を「考える葦」(roseau pensant)のごときものであるという。物力において人間はきわめて弱い。それはほんのおしで折れてくだける葦にすぎぬ。しかし宇宙が彼をたやすくおしつぶすことができるにしても、やはり人間は宇宙よりも高貴であり偉大である。人間はみずから死ぬこと、宇宙が力においてみずからに勝っていることを知っているが、宇宙はそれについて何も知らぬからである。人間の高貴さ偉大さは、かかつて思考のうちにある。「空間によって宇宙は私を包む。……思考によって私は宇宙を包む」(「パンセ」三四七、三四八)。「包む」という語 *comprendre* は空間的に包含することを意味するとともに、理解することをも意味するが、パスカルは、思考による理解を、その超越性のゆえに、やはりある意味で

宇宙を包むことであるというのである。

思考の以上のような性格をもう少し論理的にいつてみればどういうことになるであろうか。——それは、今ここに存在しないものもある仕方であれわれの生にかかわりあるものたらしめるはたらきであるから、現在(Presence)から不在(absence)へゆくはたらき、逆のいい方をすれば、不在をも現在へもたらしはたらきである。すなわち考えることは、直接に与えられているもの——あるところのものすなわち「有」を超えて、直接には与えられていない「無」に関係するはたらきであるといつてよい。

またそれは、直接な体験における肯定から脱して、間接的な否定へすみ出るはたらきだといふことができる。有に対して無、肯定に対して否定、を立てることが、考えるといふはたらきの最も形式的な規定である。——なお考えることは分別することであるともいわれるが、この分別とか区別とかいうことは、明らかに否定のはたらきを含んでいる。すなわち分別とはあるものを他のものから分かつこと、あるものが他のものではなく、まさにそれ自身であることを主張することである。区別は否定を条件としている。あらゆる肯定が直接でなく否定を介して行なわれるといふこと、それが分別であり、反省であり、思考なのである。

さて上にのべ来たつたような思考の超越力の意義は、いくら強調してもしすぎるということはないほど重いものである。この基本的な知見をしかととらえてはなさぬことが、およそ学問、特に哲学の理解には必要である。さもなければ、理性とか知的文化とか学問の自由とかいっても、結局は言葉だけに終わってしまうであろう。——けれども、ひるがえつて考えてみると、そのような意義をもつ自由な思考といえども、もちろん空に浮かんでいるのではなく、その成立の条件からいえば、常に、直接な生の体験に結びつき、一定の限られた状況を地盤としてるのである。そこでわれわれは、次にこの点を考察し、思考活動を生命活動と連絡づけて考えてみる必要がある。そしてそれは、おのずから、生物学や心理学の教えるところを省みることになるであろう。

〔注〕 パスカル：ブレイズ・パスカル（1633年～1662年）。フランス生まれの哲学者、科学者、キリスト教思想家。

問一 傍線部1はどうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人間は、呼吸や運動を行うことを本能的に知っており、呼吸や運動の仕組みを知るのは時間的に後のことである。
- b 呼吸や運動の仕組みに関する知識は、呼吸や運動の機能があらかじめ成立しているからこそ成立する。
- c 人間は、呼吸や運動の仕組みに関する知識に基づいて呼吸や運動を行っているわけではない。
- d 呼吸や運動という概念を知る前と後とで人間の体験は変化するが、呼吸や運動の機能は変化しない。

問二 傍線部2はどうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 今われわれが進めている考察は、その区別を必要とする段階にはまだ到達していない。
- b われわれは古代ギリシアの哲学者でも近世の生理学者でもないで、その区別をする必要がない。
- c ここで考察するのは日常的な思考や反省なので、そのような専門的な区別は必要ない。
- d その区別には古代ギリシア語や近代ヨーロッパ語の知識が必要なので、ここでは区別できない。

問三 傍線部3はどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 思考は、人間の精神の中で概念を通じて行われるものなので、実は狭い範囲のものにすぎず、感覚的な時間・空間を超えることはできない。

b 思考は、いまここにある具体的なものを抽象化し一般化することによって、広く普遍的なものを捉えることができる。

c 思考が時間的・空間的な制約を超えることができるのは、思考それ自体が三次元の世界に属していないからである。

d 思考が時間や空間を超えてはるかに遠いものに至るということは、物理的な時間や空間を延長していったその先に至るということではない。

問四 傍線部4はどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a いまこの時から、いまはもうない過去やいまはまだない未来へ至るはたらき。

b 現実が存在するものに限定されないで、現実に存在しないものを把握するはたらき。

c 眼前にあるものに基づいて、眼前にないものを構想するはたらき。

d いまここにあるものを通じて、時間的・空間的に遠いものを認識するはたらき。

問五 傍線部5はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 直接的な体験は現に有るものを有るものとして肯定するが、思考はその体験の中に無いものを提示することによって間接的に体験を否定する。

b 直接的な体験においてはその主体である自己は肯定されるが、体験を超え出る思考においてはその自己は間接的に否定される。

c 直接的な感覚経験は、体験においては肯定されるが、思考においては、感覚経験の到達できないものが提示されることによって、間接的に否定される。

d 直接的な体験においては有るものは有るがままに肯定されるが、思考においては有るものの他のあり方が提示されることによって、有るものが間接的に否定される。

問六 次の中から本文の内容に合致しないものを一つ選べ。

a われわれが人間として生きることには属するさまざまなたらきは事実として認めるほかないものであり、それらを体験としてもたない人にそれらを理解させることはできない。

b 電波を通じて空間的な距離を隔てた音を聞くことができるのは、思考によってつくられた装置によるのだから、直接的な音を体験することとは異なる。

c 「考える葦」という比喩は、人間は空間的に見れば宇宙に屈服する弱い存在だが、思考という観点から見れば宇宙を支配しうる強い存在であることを表現するものである。

d あるものを肯定することは、ただそのものがそのものであると認めることではなく、そのものが他のものではないと認めることによって、そのものであると認めることである。

問七 本文全体の主旨としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 体験は直接的である一方、思考は間接的である。
- b 体験は肯定的であると同時に否定的でもある。
- c 反省の超越性と否定性には大きな意義がある。
- d 体験と反省には「有」と「無」の両面がある。

